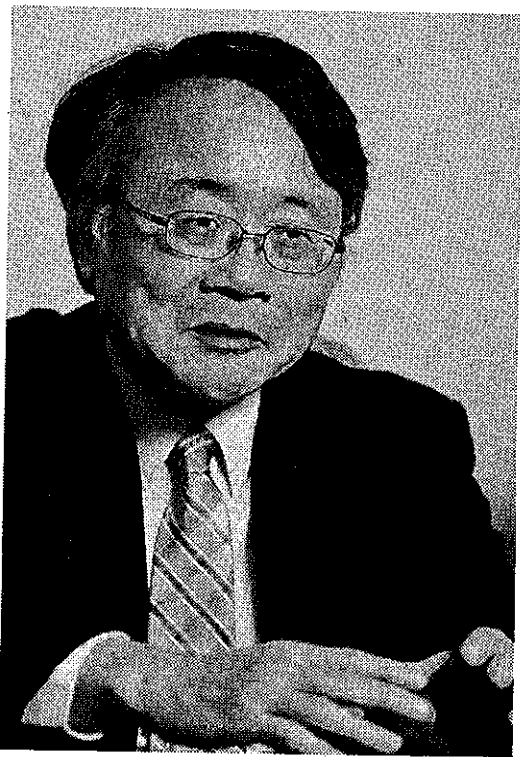


INTERVIEW

東北大学大学院教授 鈴木 岩弓さん

宗教的な心のケアを幅広く展開するためにも、さまざまな宗教、宗派が協力して進めることが肝要です



すずき・いわゆみ 1951年、東京都生まれ。東北大学文学部卒、同大学院博士課程修了。島根大学助教授、東北大学助教授を経て現在、東北大学大学院教授。専門は宗教民俗学。死生観、民間信仰などの研究で知られる。東日本大震災を受け、同大学院に「実践宗教学寄附講座」を立ち上げた。著書に『いま、この日本の家族一絆のゆくえー』（弘文堂）など。

東日本大震災の発生から3年が経過した。東北大学大学院教授の鈴木岩弓氏は、宗教者が被災者に対する電話相談や傾聴活動などを行う「心の相談室」の事務局長を務め、活動のサポートにあたる。2年前には、同大学内に「実践宗教学寄附講座」を設立。福祉施設や病院などで宗教的な心のケアを行う「臨床宗教師」の育成に力を注ぐ。鈴木氏に、被災地の現状や宗教者による精神的な支援活動の重要性を聞いた。

――震災から3年以上が経過し、被災した方々の心情はどのように変化していますか
最近私が聞いた被災者の話で印象的なのは、やっと泣けるようになったという声です。震災で甚大な被害が出た宮城県名取市出身の女性は、津波で家族と家を失いました。周囲の人も大きな被害を受けており、皆の気持ちを考え、これまで気丈に振る舞ってきたといっています。ですが、震災から3年が経過し、社会的、心理的に少しずつ落ち着いてきて、改めて厳しい現実を見つめられるようになったそうです。その女性は最後に、震災犠牲者の慰霊碑を建ててほしいと話してくれました。

慰霊碑の建立を願う声は、他の被災者からもよく聞きます。多くの被災者は津波で家や墓を失っており、犠牲者の写真や先祖の位牌といった、故人と自分をつなぐものをすべて失っているのです。中には、段ボール箱で仏壇をつくり供養している人もいました。犠牲者や先祖に思いを馳せる場として、身近な場所に慰霊碑を建てるのが求められています。

――震災による心の傷は深く、なかなか癒えませんが
被災者の中には、自分の目の前で家族が津波に流されてしまったり、多くの人がつらい体験を持っています。また、故人の声は今も聞こえるという話も聞きます。こうした死者の霊との関係に対する訴えに対し、医者や心理士だけで対処するのは難しいですから、宗教者に求められる役割は大きいと感じます。

とはいえ、宗教によって見解の違いはありますが、多くは死後世界の存在を認めて教えを説いています。つまり、「どこかで故人が見守ってくれていますよ」とその存在を肯定し、相手の気持ちに寄り添えるのが宗教者だと思つています。多くの宗教が共通して持つ死者への畏敬の念を大切に

にし、用いられる儀式などを通して悲しみを分かち合う。そうした中で、少しずつ被災者の心が救われていくのではないのでしょうか。
「心の相談室」でも、3年前から毎月数回、宮城県内の仮設住宅などを訪問し、宗教者が主催する移動傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」を開催しています。一緒にお茶を飲みながら被災者の不安な思いを聞き、相手に少しでも希望を持ってもらえるような触れ合いをするのが目的です。時には、自宅の仏壇で説経してほしいという要望もあり、宗派を問わず訪問して供養を行っています。

また、3年前から宮城、岩手、福島のFM局で、震災後に開催された「被災者支援を金銭的に多大なご支援を頂いております。また「食平和基会」には、発足当初から人的、金銭的に多大なご支援を頂いております。また「食平和基

相手を尊重して寄り添う 宗教者の社会的役割 今こそ

を生きるためのヒントを伝えるラジオ放送を始めました。音楽家の坂本龍一さんや作家の女宿宗久師など著名な方に登場して頂き、多くの反響があり、ありがたく受け止めています。併せて電話相談や傾聴活動などの情報も被災者に広くお伝えしています。

一方で、宗教者が公共的な役割を果たすためには、中立性を保つことが非常に重要だと感じます。布教ではない宗教的な心のケアを幅広く展開するために、さまざまな宗教、宗派が協力して進めることが肝要です。また、公共性を高めるため、事務局が国立大学に置かれたことも、結果論ではありますが大きな意義があったと感じています。

そうした中で、WCRP(世界宗教者平和会議)日本委員



宗教的な心のケアの普及を目指し、東北大学では「臨床宗教師」の育成を進める(写真提供・同大学「実践宗教学寄附講座」)

――高齢化が進む日本では特に重要な取り組みですね
これからの日本では、「超高齢多死社会」を迎えます。家族や地域との関係が希薄化しつつある現代では、「死」を社会がどのように受け入れるかが重要な課題となるでしょう。そうした中で、人生の最期をどのように見詰め、受け入れていくかという宗教的な視点は、多くの人の「死」に対する不安を和らげることにつながります。「臨床宗教師」の養成を今後も継続し、緩和ケア病棟や介護施設などで、利用者の希望に応じて傾聴活動ができるようなシステムを構築していきたいと思つています。

震災を通して感じるのは、宗教の社会的役割が改めて問い直されていることです。宗教は本来、人間の心が救われるために必要な教えを説いたものです。自身の宗教、宗派を大切にしながら、信仰の有無に関係なく相手を尊重して心に寄り添う。そうした宗教の持つ公共性を生かし、多くの人が穏やかな気持ちで臨終を迎えられるような社会をつくっていかねばなりません。